

いが、餘りと云へば不合理千萬  
そのため小前百姓は骨を粉にし  
て働いても、其日々々の暮しが  
出来かね、先祖代々住みなれた  
土地を離れ或は可愛い妻子を身  
賣りして、ヤツとの事の上納米  
をも納める有様、此様子ではや  
がて佐倉十三萬石の百姓は、活  
きながら飢道へ落ち、遂には  
百姓の種も絶へ果てよう、人ら  
しい血の通ふ者、正しい道の解  
つた人に、どうして之れを座視  
しておられるものか、そこで宗

吾はお察しの通り江戸へ出て、  
一應お上へお直訴する所存、喜  
右衛門どの、どうぞ百姓一同を  
憫れと思ひ、宗吾一生の願ひ此  
ま、見通して下さるまいか、  
この通り、この通り」  
相手は殘忍冷酷、氷の様な捕吏喜  
右衛門とは知れど宗吾は、兩手を  
雪の中について『この通り』と頭  
を下げた。  
『旦那、數ならぬ此爺も願ひ申  
します、百二十六ヶ村小前百姓  
の難澁に代り、命を捨て願ひ

に出られます、尊い此お名主  
様、ドゾ見通して下つせエ、  
ヨウ旦那様、何なら此の爺を代  
りに縛つておくれなせエ」  
甚兵衛爺も涙を雪の上に落しな  
がら、泣いて頼んだが、喜右衛門は  
黙々として、早や宗吾の片手に捕  
縄をかけ、次第々に、恰も蜘蛛  
が蟬を捕る様に締めながら應答し  
た、

からして間違ひだ、ソンなに縛  
つて貰ひてエなら汝も後で縛つ  
てやろう』  
言ひながら今や、右の手首を後に  
廻し繩をかけたとき、宗吾  
の眼は怒りに燃へた、彼は合羽の  
袖を跳ね上げると、腰なる道中差  
を引抜いて捕縄を絶ち切つた。  
『喜右衛門、こうまで言つて聞か  
れないなら、宗吾とても、オメ  
く更かれて行くではない、今  
の宗吾の身體は自分のではない、  
い、佐倉十三萬石の百姓の身體

じや、滅多に繩は受けられな  
い』  
『汝、シャラツ臭へ、土百姓の及  
物三昧、この喜右衛門が十手の  
牙へを見せてやろう』  
亂闘は始まつた、降り積む雪を蹴  
立つて、右へ左へと馳せ違ひ、入  
れ違つたが、逼げる一心の宗吾は  
隙を見て渡船場の方へ一散に駆け  
出した、續いて甚兵衛も遅れじと  
走せ、兩人が渡舟へ飛び移り甚兵  
衛が正に繩を解かんとする間一  
髪、執念く追ひ來つた喜右衛門は

舳へ手を掛けて引き戻した、絶  
體絶命の場合、憫れ宗吾、懸命の努  
力も印旛沼湖畔の水泡に歸し様と  
したとき  
『汝ッ！ エーイ』  
と大喝一聲、惡鬼の如く舳に寄  
つ立つた甚兵衛が手にせる櫂の一  
撃に  
『ウーン』  
と云ふ最後の呻きを發すと共に、  
喜右衛門は水煙を立て、底をも知  
れぬ、暗い夜の印旛沼へ沈んで行  
つた。